

ベドゥインの「少年の家」

ーヨルダン南部、ワディ・ブルマ東遺跡の考古学的調査ー

藤井 純夫

Bedouin Boys' Houses: An Archaeological Investigation at Wadi Burma East, Southern Jordan

Sumio FUJII

本稿は、ヨルダン南部ジャフル盆地の現代遺跡、ワディ・ブルマ東の調査報告である。この遺跡は、ベドゥインの子供らがごっこ遊びのために造った擬似住居数件から成る。調査の結果、1) この地域のベドゥインの子供たちは、北西からの強い卓越風に対する対策を幼いうちから体得しており、ごっこ遊びの家にも正しくこれを適用していること、2) そのため、各家屋が横方向に連なる特異な線状集落を形成していること、3) ごっこ遊びで最も重視されたと思われる台所に関しては、テントと同様の空間区分が、テントを模した擬似家屋は無論のこと、「石の家」を模した擬似家屋においてすら、根強く適用されていること、などの興味ある事実が判明した。これらの観察は、ジャフル盆地の新石器時代集落（または擬集落）の特異な集落形態を理解する上でも、重要な示唆を与えてくれる。

キーワード：ヨルダン、遊牧民、ワディ・ブルマ東、ベドゥイン、「少年の家」

Wadi Burma East, a small ethnoarchaeological site in the northwestern part of the Jafr basin in southern Jordan, consists of several make-believe houses that were built only recently by local Bedouin boys. A brief investigation, conducted in the summer field season of 2004, showed that: 1) the Bedouin boys are familiar with measures to cope with the northwesterly predominant wind in this region and adequately apply them to their make-believe houses; 2) for this reason, the make-believe houses are connected in a lateral direction with their entrance facing equally to the lee side, thus forming a linear settlement extending from the northeast to the southwest, and 3) as with tent houses, the make-believe houses invariably arrange a kitchen-like feature at their rear right corner. These observations provide insights into the unique formation process of Neolithic linear settlements that we have excavated in the Jafr basin.

Key-words: Jordan, Pastoral Nomads, Wadi Burma East, Bedouin, Boys' House

はじめに

筆者は、1997年から、ヨルダン南部のジャフル盆地(al-Jafr basin)で初期遊牧民の遺跡調査を続けている。2004年の冬季調査では、同盆地北西部のワディ・ブルマ北遺跡(Wadi Burma North)を含む4件の遺跡の地形測量を実施した(藤井 2005; Fujii 2005a)。その際、この遺跡の南東約0.5 kmの地点で、奇妙な遺構群を発見した。現代ベドゥインの子供たちが「ごっこ遊び」のために造ったという数件の擬似住居が、それである。遺構自体はきわめて簡素なものであったが、遊牧民の子供たちが家(またはその集合体としての集落)というものをどのように考え、どのように認識しているのかを知る上で、貴重な資料と判断された¹⁾。また、同盆地の新石器時代に固有の線状集落

(linear settlements)の解釈にとっても、有用な示唆が得られると判断された。そこで、同年夏の調査初日にこの遺跡を再訪し、簡単な調査を行った。以下は、その報告である。

遺跡の概要

ワディ・ブルマ東遺跡(WBe-BH1 = Wadi Burma East Boys' House 1)は、ジャフル盆地北西の丘陵地帯を貫流する同名のワディの上流西岸、標高約995 mの地点に位置している(図1)。遺跡の西側には緩丘陵が迫り、東側は直ちに河川敷となっている。この両者に挟まれた細長い緩斜面に沿って、北側に6件、約10~20 m離れた南側に2件、計8件の石造遺構が確認された。今回調査したの

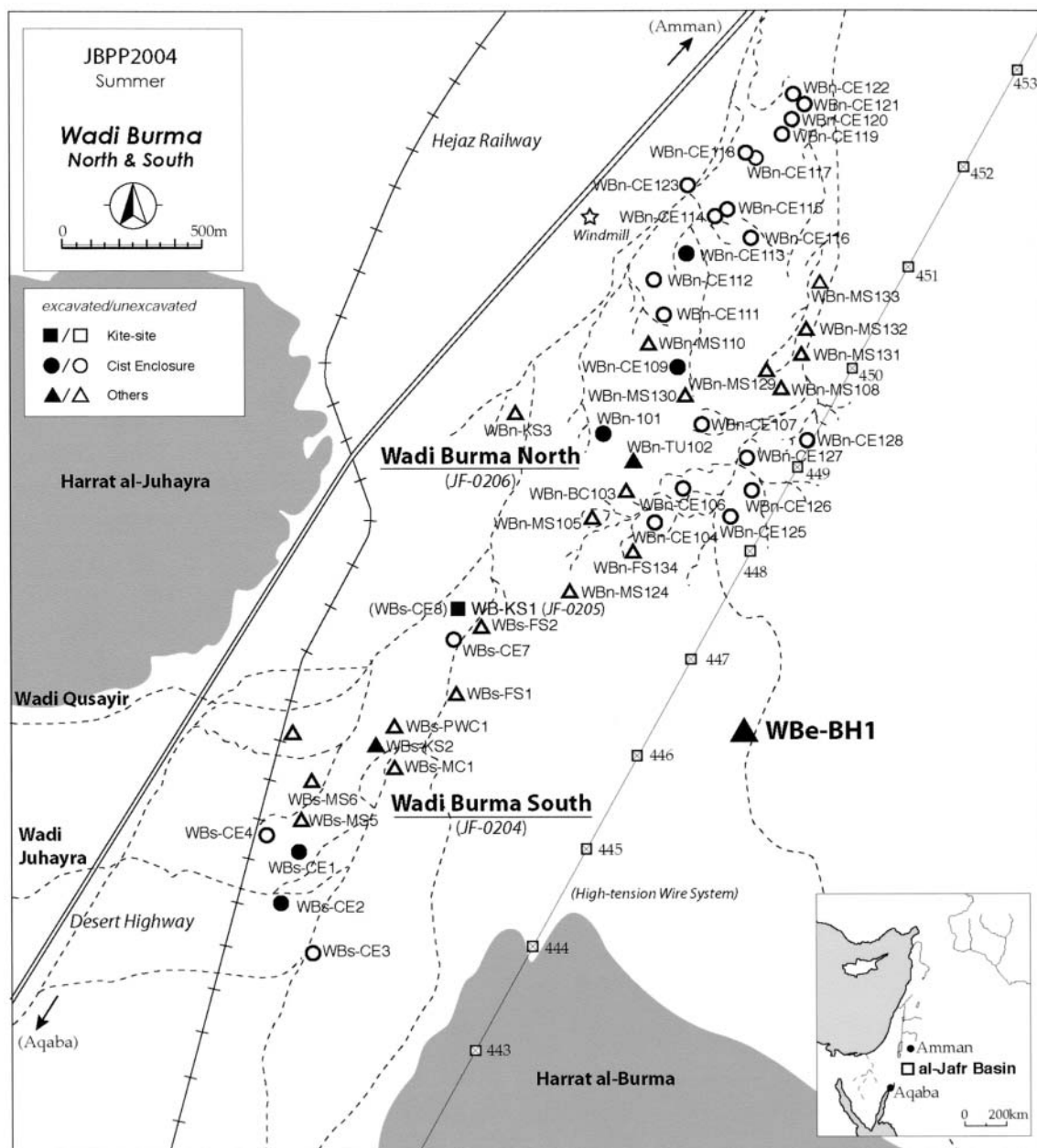


図1 ワディ・ブルマ：遺跡分布図

は、北側の6件（ユニットA～F）である。南側の2件は別グループを形成していたので、調査対象から除外した。

6件の遺構は、北流するワディと平行して、2列に並んでいた（図2～4）。西側（つまり斜面側）の列はユニットB、Dの2件を、東側（河川敷側）の列はユニットA、C、E、Fの4件を、それぞれ含んでいた。両列の間には約5mの間隔があり、これによって約1～3mの比高差が生じていた。各列を構成する遺構相互間にも、同程度の間隔が認められた。

遺構は、すべて現地表面上に築造されていた（従って、調査といっても表面を一部掃除しただけで、本格的な発掘は不要であった）。遺物も現地表面に散在しており、埋没

はしていなかった。よって、これらの遺構が比較的近年の建造物であることは明らかであろう。同じことは、遺物自体の内容（サルディーン缶、ツナ缶、ペットボトル、自動車部品などを含むこと）や、その保存状況（ペットボトルや薪のような軽量物が飛散せず、原位置をほぼ保っていたこと）からも推測できる。

建材には、周囲の斜面・河床から持ち込んだと思われる、未加工の石灰岩やフリントなど（10～20cm大）が用いられていた。ただし、遺構によってはこれよりもやや大型の石（20～30cm大）も併用されていた。建築法はきわめて簡略で、これらの建材を主として長手積み方向に、互いにやや間隔を置いて、一列・一段置きしただけであった。

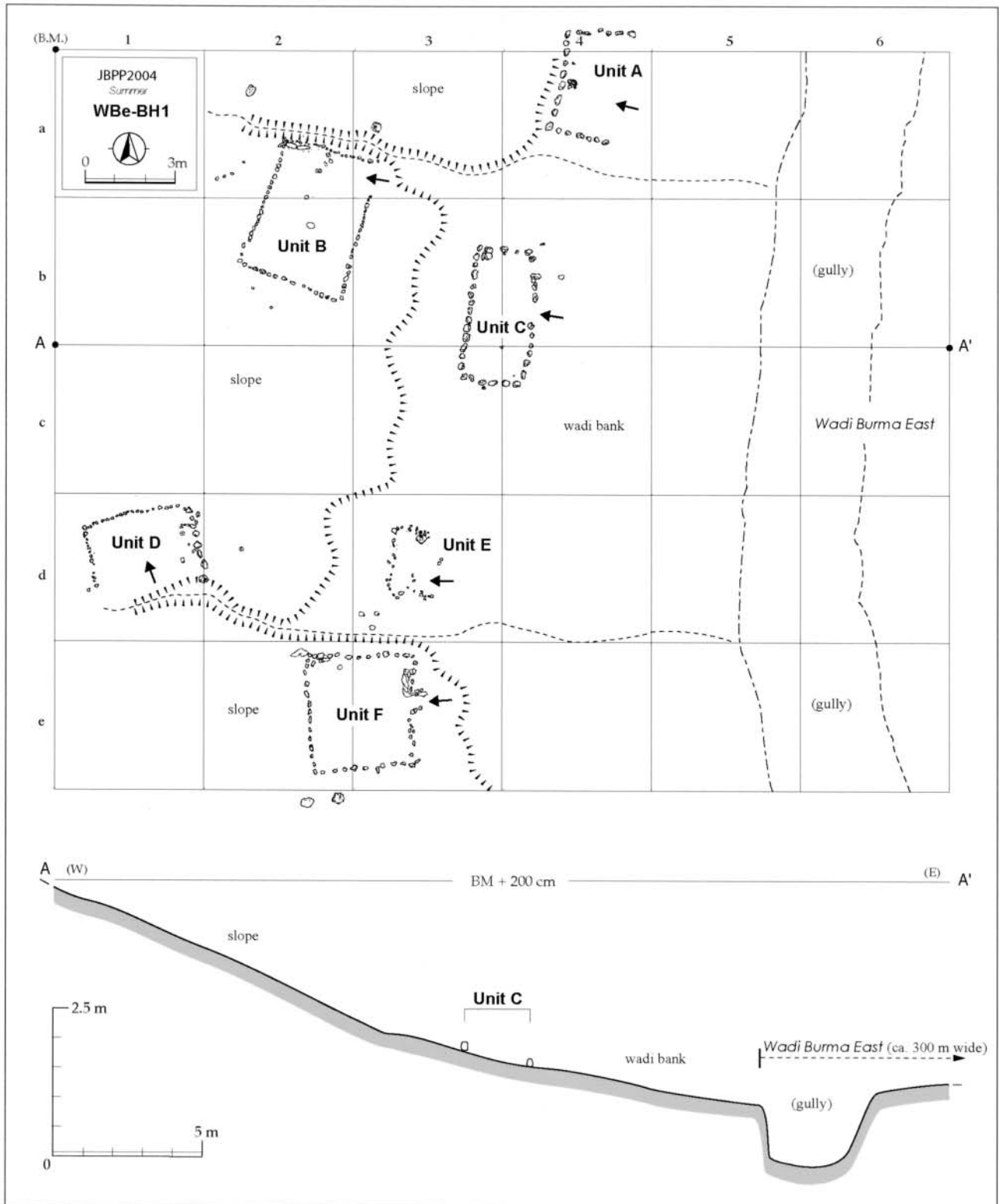


図2 ワディ・ブルマ東「少年の家」遺跡：平面図、エレベーション図



図3 遺跡全景：南から

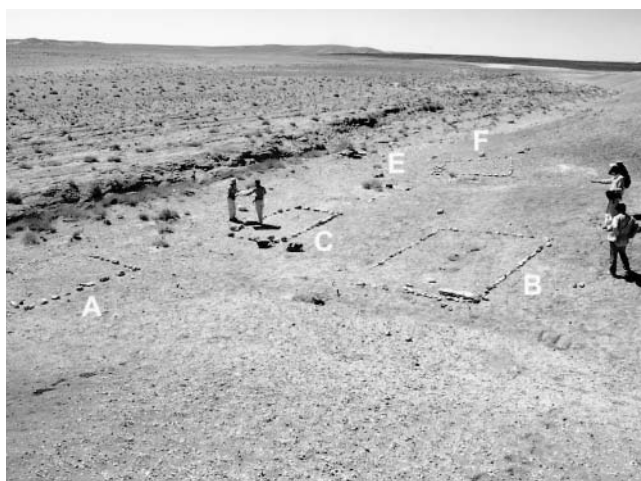


図4 遺跡全景：北から

壁面の周囲に崩落石が認められなかったのも、完成当初からこの状態（すなわち、壁体や屋根を伴わない架空建造物）であったと考えられる。建材結合のためのモルタルや、壁面周囲の基礎溝・マウンドなどの痕跡も、一切認められなかった。床面にも特別な処理は施されておらず、現在の地表面がそのまま利用されていた。

6件の遺構は、矩形または正方形プランの単室構造で、間口約2～5 m × 奥行約1.5～4 mの規模であった。6件とも方位は一定しており、東または南東方向に開口していた。これらの遺構群は、サイズ・形態・建築技法の点で、以下三つのタイプに分類できる。

タイプ1：小型かつ矩形プランで、風下側の壁面が開放されており、全体の造りがやや粗雑なもの（ユニットA, D, E）

タイプ2：大型かつ正方形またはそれに近いプランを持ち、壁面が閉鎖的で、全体の造りが良質なもの（ユニットB, F）

タイプ3：両者の中間形態（ユニットC）

タイプ1は、その形状から見て、遊牧ベドゥインの住居である「テント（ベイト・アル・シャアル）」を見立てたものであろう。これに対してタイプ2は、定住ベドゥインの「石の家（ベイト・アル・ハジャール）」を見立てたものと思われる。タイプ3はその中間形態である。タイプ1は主として河川敷に、タイプ2は主に緩斜面上に、それぞれ分布していた。その理由は不詳であるが、ジャフル盆地西縁の丘陵地帯が農耕民の定住域となっていること、これに対して東方のステップが遊牧民の生活圏となっていることと、対応しているのかも知れない。

遺構と遺物

6件の遺構を、出土遺物と併せて、北から順に紹介する。遺物の出土位置については図5を、その内訳については表1を、それぞれ参照されたい。

1. ユニットA

ユニットAは、遺跡北端の河川敷に位置する。間口約3 m × 奥行約2 mの規模で、型式的には、東に向かって大きく開口する半開放的な小型矩形遺構（タイプ1）に相当する（図6-1）。建材には、比較的大型（20～30 cm 長）の河原石が用いられていた。ただし、全体の造りはやや粗く、建材間の隙間が大きいこと、奥壁が多少歪んでいること、北側壁面が開き気味なこと、などの特徴が認められた。なお、屋内中央奥には小型の集石遺構があった。

このユニットからの出土遺物は、プラスチック製のイヤリング1点だけである（図6-2）。出土位置は、上述の集石遺構の北約0.5 mの地点であった。

2. ユニットB

この遺構は、ユニットAの東南東約7 mの緩斜面上に位置する。間口約4.5 m × 奥行約3.5 mの閉鎖型矩形遺構（タイプ2）で、北東隅に幅約1 mの入り口を備えていた（図6-3）。建材には小型の川原石が用いられていたが、建材間の間隔は密で、北壁を除いて壁面自体の直線性もよく保たれていた。屋内右奥隅には、50 cm 大の石灰岩2個を含む集石遺構があった。また、床面中央には2基の炉（H-01, -02）があり、炭化物の混じる薄い灰の堆積が認められた。ごっこ遊びで実際に火を焚いた痕跡と考えられる。

このユニットからは、計21点の遺物が回収された（図6-3）。そのうち18点（85.7%）が、上記集石遺構の内部または周辺で確認された（図8）。その内訳は、プラスチック製ペットボトル5（図6-4: 3, 4, 5, 17, 18）、ペットボトルの蓋1（同19）、プラスチック製石鹸入れの蓋1（同7）、

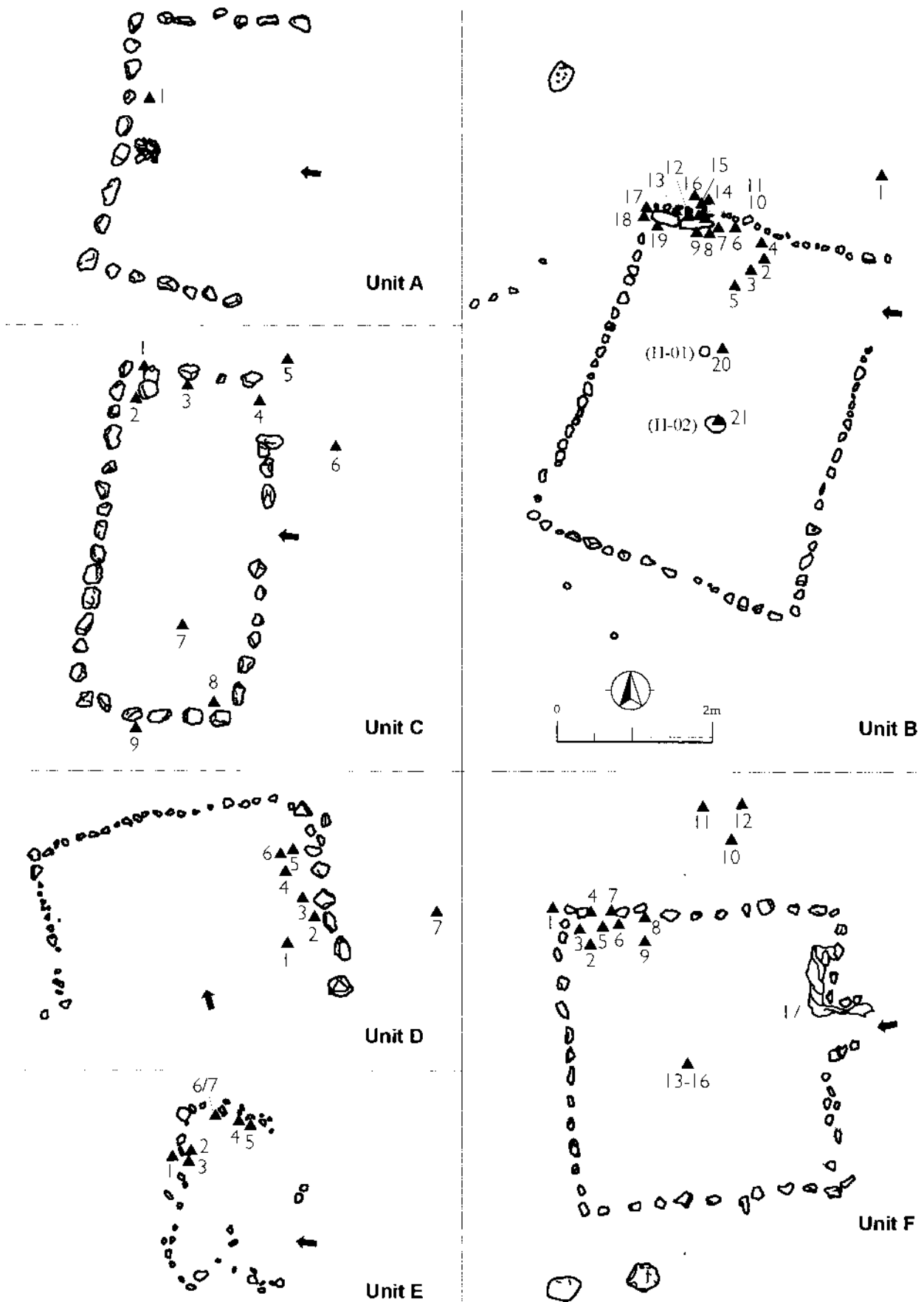


図5 各ユニットの遺物出土位置（遺物番号は表1、図6,7の番号と対応している）

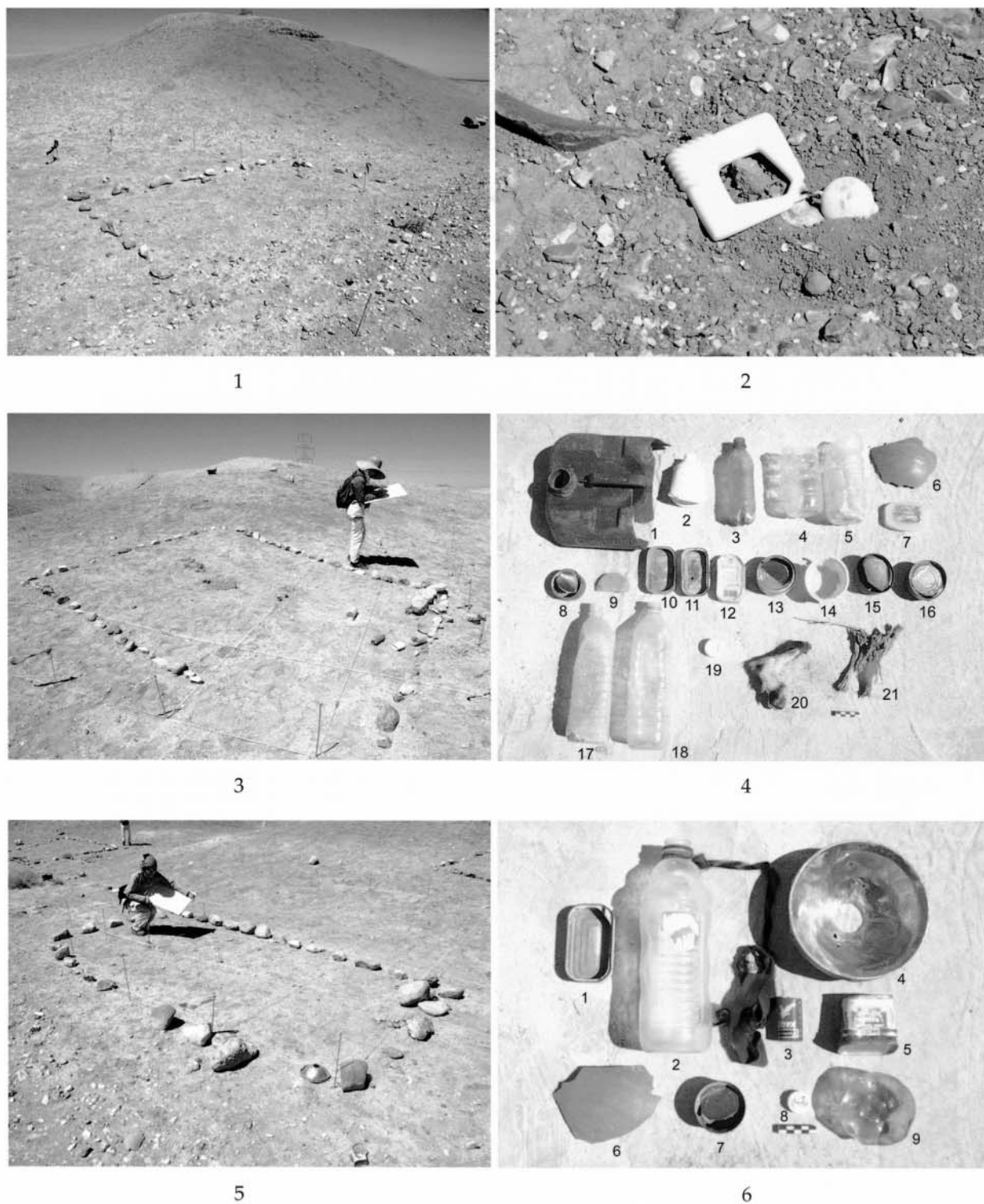


図6 ユニットA～C

- | | | | |
|---|-----------------|---|-----------|
| 1 | ユニットA全景 (南東から), | 2 | ユニットA出土遺物 |
| 3 | ユニットB全景 (北東から), | 4 | ユニットB出土遺物 |
| 5 | ユニットC全景 (北東から), | 6 | ユニットC出土遺物 |

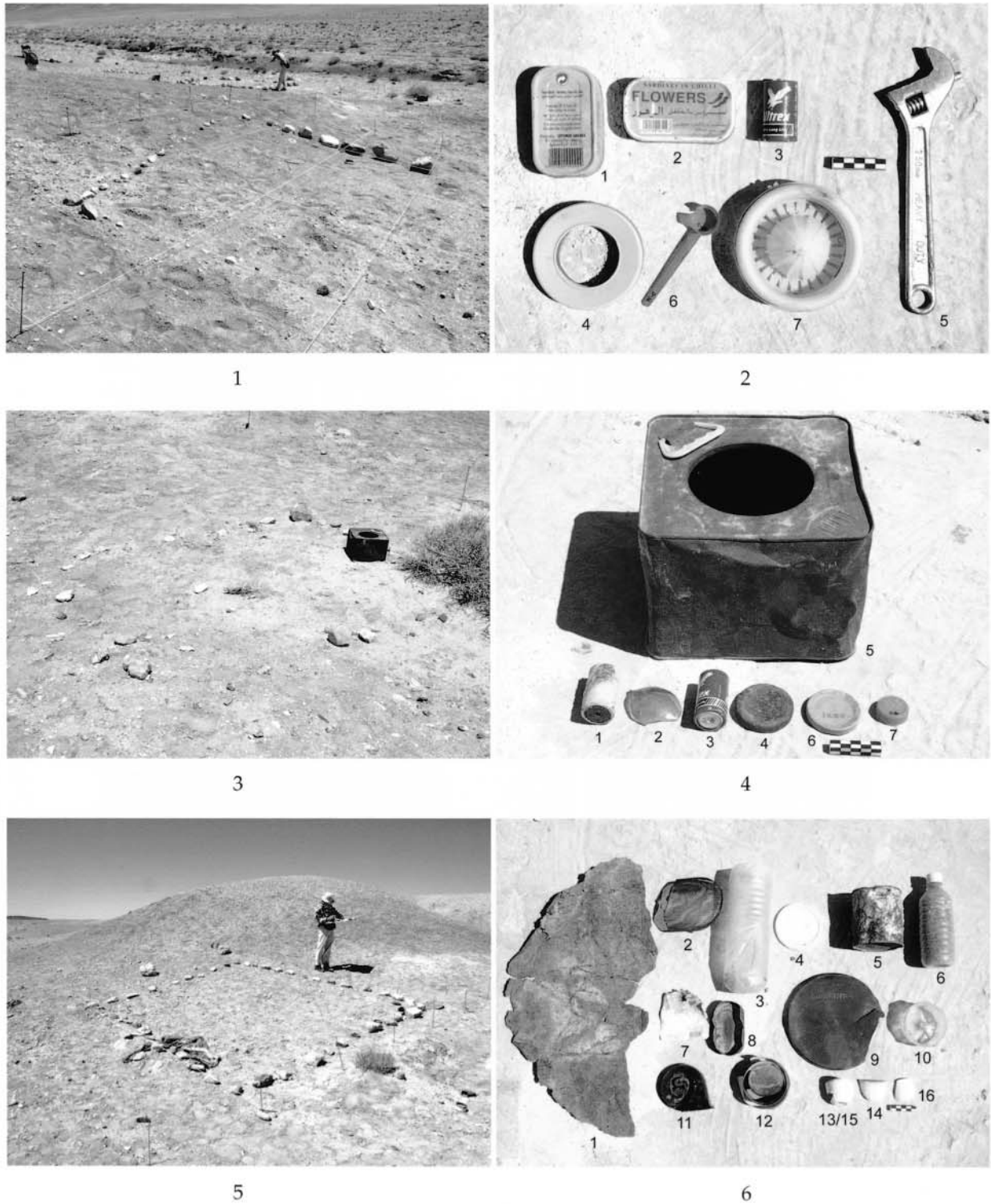


図7 ユニットD～F

- | | | | |
|---|----------------|---|-----------|
| 1 | ユニットD全景（南西から）, | 2 | ユニットD出土遺物 |
| 3 | ユニットE全景（南東から）, | 4 | ユニットE出土遺物 |
| 5 | ユニットF全景（北東から）, | 6 | ユニットF出土遺物 |

表1 ワディ・ブルマ東遺跡出土の遺物一覧表

遺構 No.	遺物	材質	状態	コンテキスト	備考 (ブランド名/ 接合関係/ 製造年月日)
A	1 耳輪	プラスチック	完形	集石周辺	
B	1 大型容器	〃	上半	屋外 (入り口北約1m)	<i>Jopetrol</i>
	2 瓶	〃	完形	集石周辺	
	3 ベットボトル	〃	〃	〃	<i>7up 400ml</i>
	4 ベットボトル	〃	下半	〃	
	5 ベットボトル	〃	〃	〃	
	6 容器	〃	胴部断片	〃	C-06と接合
	7 石けん入れ	〃	完形	〃	
	8 ツナ缶	鉄	〃	〃	<i>Sunbell</i> ; 9 Jul., 2003
	9 スポンジ	ナイロン	断片	〃	
	10 サルディーン缶	鉄	完形	〃	<i>Sepomer Sahara</i> (hot)
	11 〃	〃	完形 (fl2)	〃	<i>Bab Ma'sour</i>
	12 〃	〃	完形	〃	<i>Sepomer Sahara</i> (normal)
	13 ツナ缶	〃	完形	〃	<i>Sunbell</i> ; 21 Feb., 2003
	14 ヨーグルトカップ	プラスチック	完形	〃	<i>Al-Baraka</i>
	15 ツナ缶	鉄	完形	〃	30 Sep., 2002
	16 〃	〃	完形	〃	26 Aug., 2002
	17 ベットボトル	プラスチック	完形	〃	
	18 〃	〃	完形	〃	
	19 ベットボトル蓋	〃	完形	〃	
	20 ヤギの下肢	-	-	炉1	調理痕跡なし
	21 薪	-	-	炉2	燃焼痕跡なし
C	1 サルディーン缶	鉄	完形	集石周辺	no brand (hot)
	2 ベットボトル	プラスチック	完形 (紐付き)	〃	
	3 単1乾電池	-	完形	〃	<i>Ultex</i> (size D)
	4 自動車部品	ステンレス?	完形	入り口周辺	
	5 コーヒー缶	鉄	完形	屋外 (入り口東約0.5m)	<i>Sharkatly Extra</i> ; 12 Jul., 2003
	6 容器	プラスチック	胴部断片	〃 (入り口東約1m)	B-06と接合
	7 ツナ缶	鉄	完形	屋内 (中央やや南寄り)	<i>Ship</i> ; Mar., 2002
	8 ベットボトル蓋	プラスチック	完形	屋内 (南東隅)	<i>Coca Cola</i>
	9 ベットボトル	プラスチック	底部	屋外 (南壁沿い)	
D	1 サルディーン缶	鉄	完形	集石周辺	<i>Sepomer Sahara</i> (normal)
	2 〃	〃	〃	〃	<i>Flowers</i> (hot)
	3 単1乾電池	-	〃	〃	<i>Ultex</i> (size D)
	4 リング状製品	プラスチック	〃	〃	made in China (0.6 l)
	5 スパナ	鉄	破損	〃	
	6 計量スプーン	プラスチック	完形	〃	
	7 レモン絞り器	〃	完形	屋外 (東壁沿い)	
E	1 方形容器	鉄	完形 (サビ)	集石周辺	
	2 単1乾電池	-	完形 (加熱)	〃	E-3と同一ブランド
	3 ガラス容器	ガラス	胴部断片	〃	
	4 単1乾電池	鉄	完形	〃	<i>Ultex</i> (size D)
	5 蓋	鉄	完形 (サビ)	〃	
	6 〃	〃	完形	〃	27 Aug., 2003
	7 ベットボトル蓋	プラスチック	〃	〃	<i>Nestle</i>
F	1 ドラム缶の蓋	鉄	半分 (サビ)	〃	
	2 自動車部品	〃	完形	〃	
	3 ベットボトル	プラスチック	下半	〃	
	4 蓋	〃	完形	〃	
	5 缶	鉄	完形 (サビ)	〃	
	6 ベットボトル	プラスチック	完形 (砂入り)	〃	
	7 サブリ飲料粉末袋	紙	完形	〃	27 Aug., 2003
	8 サルディーン缶	鉄	〃	〃	
	9 蓋	プラスチック	〃	〃	
	10 ベットボトル	〃	底部	屋外 (北壁から約1m)	<i>Woegner</i>
	11 自動車部品?	〃	完形	〃	<i>Ghadeer</i>
	12 ツナ缶	鉄	〃	〃	30 Sep., 2002
	13 コーヒーカップ	磁器	破片	屋内 (床面中央)	F-14と接合
	14 〃	〃	〃	〃	
	15 〃	〃	〃	〃	F-12と接合
	16 〃	〃	〃	〃	
	17 麻袋	麻	部分	入り口	

プラスチック製容器の断片 2 (同 2, 6)、スポンジ断片 1 (同 9)、ヨーグルト容器 1 (同 14)、サルディーン缶 3 (同 10～12)、ツナ缶 4 (同 8, 13～15) である。飲食物の容器が、大半を占める。その多くは著しく風化または破損しているため、どこかで拾った空の容器を、ままごとの道具として持ち込んだものと思われる。一方、2 基の炉からは、ヤギの下肢 1 本 (同 20) と薪数片 (同 21) が出土した。饗宴料理の調理・共食ごっこが行われたのかも知れない。これとは別に、入り口の北側約 1 m の位置から、プラスチック製大型液体容器の断片 (同 1) が出土した。

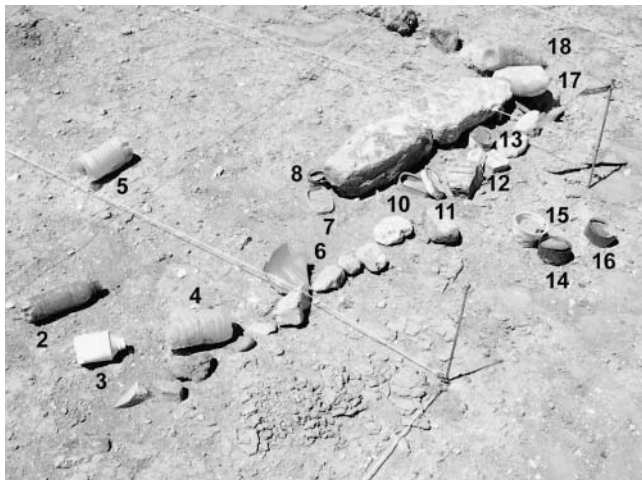


図 8 ユニット B：北西隅の集石と遺物（北東から）

3. ユニット C

この遺構は、ユニット A の南南東約 4.5 m の平坦な河川敷に位置する。間口約 4.5 m × 奥行き約 2 m の閉鎖型矩形遺構（タイプ 3）で、東壁中央に幅約 0.7 m の狭い入り口を備えていた（図 6-5）。建材にはやや大型の川原石が用いられていたが、ユニット A 同様に建材間の隙間が大きく、奥壁を除いて直線性もやや劣っていた。向かって右奥隅に、小規模の集石遺構があった。

出土遺物は計 9 点（図 6-6）。うち 3 点（=33.3 %）が、上記の集石部分から出土した。その内訳は、サルディーン缶 1（図 6-6: 1）、約 50 cm の赤い紐を付けたペットボトル 1（同 2）、単 1 乾電池 1（同 3）である。これとは別に、入り口付近からは、自動車のヘッドライト反射板 1（同 4）、コーンビーフ缶 1（同 5）、青色プラスチック容器断片 1（同 6）、の 3 点が収集された。また屋内南寄りの部分からはツナ缶 1（同 7）、ペットボトルの蓋 1（同 8）が、南壁外側からはペットボトルの底部 1（同 9）が、それぞれ回収された。容器類または容器に見立てた物品が多いこと、出土位置が屋内右奥隅の集石遺構に集中していることは、ユニット B と同様である。いずれも、調理・食事ごっこ

の道具と考えられる。電池は、カセットデッキのような家電品を見立てたものと思われる。

ユニット D

ユニット D は、西側の列を構成するもう一つのユニット（ユニット B）から南南東に約 8 m 離れた緩斜面上に位置していた。間口約 4 m × 奥行き約 2 m の半開放的な小型矩形遺構（タイプ 1）で、南南東に開口していた（図 7-1）。建材は小型の川原石であるが、東壁に限ってやや大型の石が用いられていた。炉や集石遺構は認められなかった。

遺物は計 7 点である（図 7-2）。うち 6 点（85.7 %）が、東壁添いの床面から出土した。その内訳は、サルディーン缶 2（図 7-2: 1～2）、（ユニット C 出土例と同一ブランドの）単 1 乾電池 1（同 3）、環状のプラスチック製品 1（同 4）、先端の破損したスパナ 1（同 5）、プラスチック製の計量スプーン 1（同 6）である。残り 1 点のプラスチック製レモン搾り器 1（同 7）も、室外とは言え、やはり東壁に添った位置で見つかった。いずれも調理・食事ごっこの道具と思われる。なお、スパナは台所の常備品であり、ガスボンベの取り替えの際に用いられる。この地域のベドゥイン家庭には、必ず備えられている。どこで拾ったのか、壊れたスパナを持ち込んだところがいかにもごっこ遊びらしく、微笑ましい。

5. ユニット E

ユニット E は、ユニット C の南南東約 5 m の平坦な河川敷に位置する（図 7-3）。間口約 2 m × 奥行き約 1.5 m の半開放的な小型矩形遺構（タイプ 1）で、東方向に開口している。建材は小型の川原石である。6 件の遺構の中で、このユニットだけは保存状態が悪かった。

遺物 7 点は、すべて屋内右奥隅から出土した（図 7-4）。その内訳は、（ユニット C, D 出土例と同一ブランドの）単 1 乾電池 2（図 7-4: 1, 3）、ガラス容器片 1（同 2）、ブリキ製の大型食用油缶 1（同 5）、ガラス瓶の蓋 2（同 4, 6）、ペットボトルの蓋 1（同 7）である。なお、ガラス瓶の蓋のうちの 1 点（同 1）は、ブリキ製の大型缶（同 5）の中から入れ子の状態で発見された。本体を伴わない蓋ばかりが出土しているが、これは、食器に見立てたためであろう。

6. ユニット F

この遺構は、ユニット E の南南西約 2 m の緩斜面上に位置する。位置的には東列に属するが、標高はやや高く、むしろ西列の構成要素と見なすべきかも知れない。規模（間口約 4 m × 奥行き約 3.5 m）および型式（正方形プランの閉鎖型遺構＝タイプ 2）の点でも、西列の特徴を備えていた（図 7-5）。入り口は東壁やや北寄りの部分にあり、1 対の短い突出壁を伴っていた（図 9）。建材には、中型（10～20 cm 大）の川原石が用いられていた。建材間の間



図9 ユニットF：入口に絡み付けられた麻袋（北東から）

隔はやや大きかったが、壁面の直線性自体はよく保たれていた。屋内右奥隅には、小型の集石遺構があった。

出土遺物は、計17点（図7-6）。うち9点（52.9%）が、上記集石遺構の周辺で出土した。その内訳は、ドラム缶の蓋の断片1（図7-6: 6）、スピーカーの覆い1（同2）、ペットボトル1（同3）、ガラス瓶の蓋1（同4）、空き缶1（同5）、砂の詰まった小型ペットボトル1（同6）、サプリメント粉末袋1（同7）、サルディーン缶1（同8）、プラスチック製容器の蓋1（同9）、である。他のユニット同様、食器または食器に見立てた品物が多かった。一方、屋内中央床面からはコーヒー碗の断片4点（同13～16）が出土したが、うち2点は互いに接合した。器形・文様の類似性から見て、他の2片も同一個体または同一モデルの別個体に属するものと考えられる。なお、屋外北側部分からは、ペットボトルの底部1（同10）、自動車部品と思しき渦巻き状のプラスチック製品1（同11）、ツナ缶1（同12）が、出土した。また、入り口北側の壁面には、テント補修用の麻袋が添えられていた（図9）。

遺構の用途・年代

用途は明白であろう。建築当事者が特定できなかったため直接的な証言は得られなかったが、調査団の夫頭を長年務めているマシュフル・スレイマン・マシャーン・ディアバート君（当時28歳）を含む複数のベドゥイン青年から、「少年の家（ブユート・アウラード）」であるとの確言を得ている²⁾。彼ら自身、子供時代にこうした家を造って遊んだ経験があり、幼い弟たちは今でもこの種のごっこ遊びを続けているとのことであった³⁾。

遺構自体の特徴も、上記の推定を裏付ける。未加工の川原石を地上に一例・一段分並べただけの、壁体や屋根を伴わない架空建造物は、明らかにごっこ遊びの家であろう。遺物の内容からも、同じことが言える。第一に、飲食物の

空き容器や食器に見立てた物品が多いことが、注目される。単なる拾得物だけではなく、ごっこ用に手を加えたものもある。例えば、ペットボトルの底の部分だけをナイフで切り揃えて食器に見立てたもの（図6-4: 4, 5; 図6-6: 9; 図7-6: 3, 10）、首の部分にわざわざ紐を付けているもの（図6-3: 2）、中に砂を積めているもの（図7-6: 6）、などがそれである。容器本体を伴わない蓋だけの出土例が多いのも、ごっこ遊びならではの現象と言えよう（図6-4: 7, 19; 図6-6: 8; 図7-4: 4, 6, 7; 図7-6: 4）。このほか、破損したスパナ（図7-2: 5）、古びた乾電池（図6-6: 3; 図7-2: 3, 図7-4: 1, 3）、ヤギの下肢（図6-4: 20）などの出土も、様々な「見立て」を眼目とするごっこ遊びに固有の現象と考えられる。これらのことから、本遺構群がごっこ遊びの家であることはまず間違いないと思われる。

一方、遺構の構築時期は、出土遺物に刻印・印刷された製造年月日から、ほぼ正確に割り出すことができる（表1）。手がかりとなる紀年銘資料は、計9点。うち最も新しい日付は、ユニットE出土のガラス容器蓋（図7-4: 6）およびユニットF出土のサブリ飲料粉末袋（図7-6: 7）に印刷された「2003年8月27日」である。よって、この二つの遺構の構築時期は、この日から遺跡の発見日（2004年1月）までの、約半年間に絞ることができる。製造日から市場への流通・消費・廃棄・再利用までの間に最低1ヶ月以上の時間が介在するとすれば、上記遺構の構築時期は2003年の秋以降と見なし得るであろう。

加えて、この地域のベドゥインの移動パターンがある。この地域のベドゥインは、西方の丘陵地帯と東方のステップ・沙漠地帯との間を季節移動し、その中間点であるワディ・ブルマ地域には、通常、春または秋にキャンプすることが多い。真冬にこの地域でキャンプすることは希である。よって、上記二遺構の構築時期は、2003年の秋にほぼ特定できよう。だとすれば、我々が遺構を発見したのはそれから1～2ヶ月後のことになる。遺物が飛散せずほぼ原位置を保っていたのは、そのためであろう。

では、残り4件の遺構については、どのようなことが言えるであろうか。まずユニットBであるが、この遺構からは「2003年7月9日」の製造年月日を刻印されたツナ缶が出土している（図6-4: 8）。これは、ユニットE, Fの年代決定の決め手となった遺物の製造年月日「2003年8月27日」に近い日付である。よって、これら3件のユニットはほぼ同時に構築されたと考えてよからう。ところで、このユニットBから出土した青色のプラスチック製容器断片（図6-4: 6）は、ユニットCから出土した同タイプの遺物（図6-6: 6）と接合した。従って、このユニットもほぼ同時期と考えられる。残るユニットはA, Dの2件であるが、後者から出土した単1乾電池（図7-2: 3）はユニッ

ト C, D から出土したもの（図 6-6: 3; 図 7-2: 3）と同一ブランドかつ同程度の風化を示しているの、これまたほぼ同時期と見なし得るであろう。遺物が 1 点しか出土しなかったユニット A だけは決め手を欠いているが、遺構間のまとまりから見て、これもほぼ同時期であった可能性が高い。

以上のことから、本遺構群は、2003 年の秋に、ベドゥインの子供たちがほぼ同時に造った「ごっこ遊びの家」すなわち「少年の家」である、と結論できる。ただし、用途については建築当事者の証言が欠けているため、今後の調査で補う必要がある。

考古学的意義

ワディ・ブルマ東遺跡で確認されたユニークな遺構群、ベドゥインの「少年の家」から、どのような考古学的意義をくみ取ることができるであろうか。筆者が調査しているジャフル盆地の新石器文化集落との関連で言うと、以下の 4 点を指摘できる。

1. 卓越風対策

第一は、ベドゥインの子供たち（ひいてはこの地域の遊牧民一般）に備わった、卓越風の方位に対する鋭敏な感覚である。そのことは、「少年の家」の立地、方位、入り口のサイズ・形状、以上の 3 点に明確に表れている。

立地とは、緩斜面の東側に家屋を配置していることを言う。これは、この地域の強い卓越風（北西～西風）から家屋を護るための工夫であろう。その効果をさらに高めているのが、遺構の方位である。6 件の遺構はいずれも卓越風を後壁で遮断し、その風下に当たる東～南東方向に入り口を設けている（無論、ごっこ遊びの家であるから実際に風を遮断できるわけではないが、そのように方向づけられていることが重要）。加えて、入り口のサイズ・形状がある。閉鎖型遺構（ユニット B, C, F）の入り口はいずれも幅が狭く、風が吹き込みにくい構造になっていた。ユニット F に至っては、一対の短い突出壁をも付設していた。これは、西アジア周辺乾燥域の先史遺構に特徴的な「両袖タイプの防風壁」に相当する（藤井 2004b: 70）。この遺跡から北西に約 10km 離れた ワディ・ウム・クタイファ（Wadi Umm Qtaifa）の「少年の家」にも、同様の防風壁が備わっていた（図 10）。

西アジア新石器文化の防風壁・防風策については以前に論じたことがあるが（藤井 2004b）、本例はその現代版・子供バージョンと言える。しかし、子供であるからといって、その内容が曖昧であったり、稚拙であったりするわけではない。むしろ、子供ならではの率直な表現が見て取れる。重要なのは、ごっこ遊びの家ですら卓越風対策を疎かにしていない、ということである。この点に、西アジア周辺乾燥域、とりわけジャフル盆地における卓越風問題の切

実さを見ることができる。新石器時代の集落に防風壁や防風策が多見されるのも、当然と言えよう。

2. 特異な集落形態

卓越風対策の重要性は、個々の家屋の方位や出入り口の形状のみならず、集落全体の構造にも一定の制約を与える。すなわち、集落内の家屋が常に同一方向を向くため、互いのプライバシーを尊重しようとするれば、横方向に展開する直線的な集落形態をとらざるを得ない、という制約である。

この場合、家屋数が増すにつれて、二つの集落形態が発生し得る。一つは、この直線的な配置をひたすら一方に延ばしてゆく、一線的な集落形態である。後述するように、ジャフル盆地の新石器時代集落（または擬集落）は、この形態をとっている。もう一つは、直線的な展開を維持しつつも、複数の平行線に分割する集落形態である。ワディ・ブルマ東遺跡の「少年の家」が、これに当たる。ヨルダン山間部の集落でも、この形態が一般的である。平行線型の展開は斜面に立地する集落の必然でもあるが、一面においては、この形態をとりやすい立地が好まれているとも言える。なお、考古学的な類例としては、ゴラン高原の銅石器時代集落ラスム・ハルブーシュ（Rasm Harbush; Epstein 1998）などがある。

集落形態に関連してもう一つ指摘しておきたいのが、家屋と家屋の間隔である。ベドゥインの「少年の家」の配置には、彼らの本家屋であるテントの特性が強く投影しているように思われる。周知のように、ベドゥインのテントの周囲には 10m 以上の長いロープが多数張り巡らされる。長いロープが必要なのは、屋根の傾斜と同じ角度でロープを引くのがテントを最も安定させるからであるが、その結果、テントの四周には多数のロープが交錯する広い空間が生まれる。当然のことながら、この空間内に別のテントを立てることはできない。従って、テントとテントの間には



図 10 ワディ・ウム・クタイファの「少年の家」

自ずから一定の間隔が生ずることになり、これがプライバシーの保護にも役立っている。この特性が、(テントあるいはテントから派生した石の家を見立てた) ベドゥインの「少年の家」に投影しているのであろう。ほぼ同時に造ったごっこ遊びの家にしては不可解な現象 — 各家屋が一定の間隔を置いて線状に配置され、互いに決して向かい合わないという奇妙な現象 — が認められるのは、まさにそのためと考えられる。

3. 屋内の空間区分

集落構造から屋内空間に目を転じると、そこにも興味深い現象が認められる。注目すべきは、屋内右奥隅における小型集石遺構の存在と、この部分への遺物の集中である。

集石遺構は、ユニット A, B, C, F の4件に認められた。このうちユニット A の集石遺構だけは奥壁中央付近にあったが、他の3件の集石遺構はいずれも室内右奥隅に位置していた。集石遺構の存在自体は明確ではないが、向かって右側の壁面だけに大型の石を使用していたユニット D も、これに準ずると考えてよかろう。残る1件(ユニット E)については詳細不明であるが、やはり室内右奥隅に大型の石を配置していることが注目される。従って、6件の遺構のうち、3件が室内右奥隅に明確な集石遺構を備え、2件はそれに準ずる特徴を持ち、1件のみが異なる場所に集積遺構を伴う、ということになる。

遺物が集中するのも、この部分である。ユニット B では $18/21=85.7\%$ 、ユニット C では $3/9=33.3\%$ 、ユニット D では $6/7=85.7\%$ 、ユニット E では $7/7=100\%$ 、ユニット F では $9/17=52.9\%$ の遺物が、室内右奥隅の集石遺構またはそれに準ずる箇所から出土した。唯一、ユニット A だけが $0/1=0\%$ であるが、これは、集石遺構が例外的に屋内中央に位置していたからにほかならない。遺物が集石遺構の周辺に集中することには変わりはない。

問題はこの集石遺構の意味であるが、これは明らかであろう。ベドゥインのテントにおける空間区分(通常、向かって右が台所)から見ても、また出土した遺物の内容(食器・容器が中心)から見ても、集石遺構をしばしば伴う屋内右奥隅の空間が台所(マトバフ)に見立てられていることは明らかである。ユニット D の右壁添いからスパナ(台所用ガスボンベの締め具)が出土したことも、同じ理由であろう。面白いのは、この原理が、テントを見立てた事例のみならず、「石の家」を見立てた事例にも適用されていることである。無論、実際の「石の家」の間取りは、必ずしもそうなっているとは限らない。その意味で、テント固有の室内空間区分が子供らの心中にいかにも深くインプットされているかが分かる。

さて、室内右奥隅が台所だとすれば、他の空間はこれ以外の機能空間ということになる。この点で注目されるのが、

ユニット B の床面中央から出土したヤギの下肢および薪である。これは、ベドゥインの饗宴料理であるマンサフなどの共食ごっこがこの空間で行われたことを意味しているのであろう。だとすれば、このユニットの屋内中央の空間は客間(ディーワーン)に見立てたもの、ということになる(2基の炉は、従って、接客用の炉であろう)。これと同じことは、ユニット F についても言える。床面中央から出土したアラビア・コーヒーの茶碗片は、この部分が接客空間であったことを裏付けている。

4. ジャフル盆地線状集落との相関

筆者がベドゥインの「少年の家」に着目したのは、それが単に珍しかったからではない。ジャフル盆地の新石器時代線状集落との相関をそこに見出したからである。先土器新石器文化 B 後期の移牧拠点ワディ・アブ・トレイハ(Wadi Abu Tulayha; 藤井 2006, 2007; Fujii 2006a, 2006b, 2007a, 2007b)、先土器新石器時代 C ~ 後期新石器時代の擬集落ハラート・アル・ジュハイラ(Harrat al-Juhayra; 藤井 2005; Fujii 2005b)、後期新石器時代の擬集落カア・アブ・トレイハ西(Qa' Abu Tulayha West; 藤井 2001, 2002a, 2002b, 2003, 2004a, 2004b; Fujii 2000, 2001, 2002a, 2002b, 2003) — これらの集落・擬集落が等しく線状の集落形態を示すのはなぜか(図 11)。

最大の理由は、やはり卓越風対策であろう。先述したように、この地域特有の北西からの強い卓越風を家屋の後壁で遮断しようとする、どの家屋も南東方向に開口するプランをとらざるを得ない。そうした家屋が横方向に連結すれば、自ずから線状集落が生まれる。よって、3件の遺跡に見られる線状集落は、風の強いヨルダン高原に通有の集落形態と言えるであろう。事実、アズラック盆地の新石器時代集落も、ジャフル盆地と同様の線状集落を形成している(Garrard et al. 1994)。対照的に、同じ周辺乾燥地でも起伏の大きい、従って地形的に風を緩和できるワディ・ヒスマ、ネゲブ、シナイ半島などの新石器時代集落では、蜂の巣状の密集集落(beehive type settlements)が一般的である(Kirkbride 1978; Goring-Morris 1993; Henry et al. 2003)。

ここで注目すべきは、移牧拠点とは言え、実際に人が居住したワディ・アブ・トレイハの出先集落だけでなく、実際には誰も居住しない、墓制の一部としての擬集落にもこうした方位感覚が認められる、という点である。これは、ごっこ遊びの「少年の家」にすら周到的な卓越風対策が認められることと通底する現象と言えよう。実際に居住する家であろうと、そうでなかろうと、卓越風問題を離れては家そのものを連想し得ない。後期新石器時代の擬集落や「少年の家」の特異な集落形態は、そのことを例示しているように思われる。

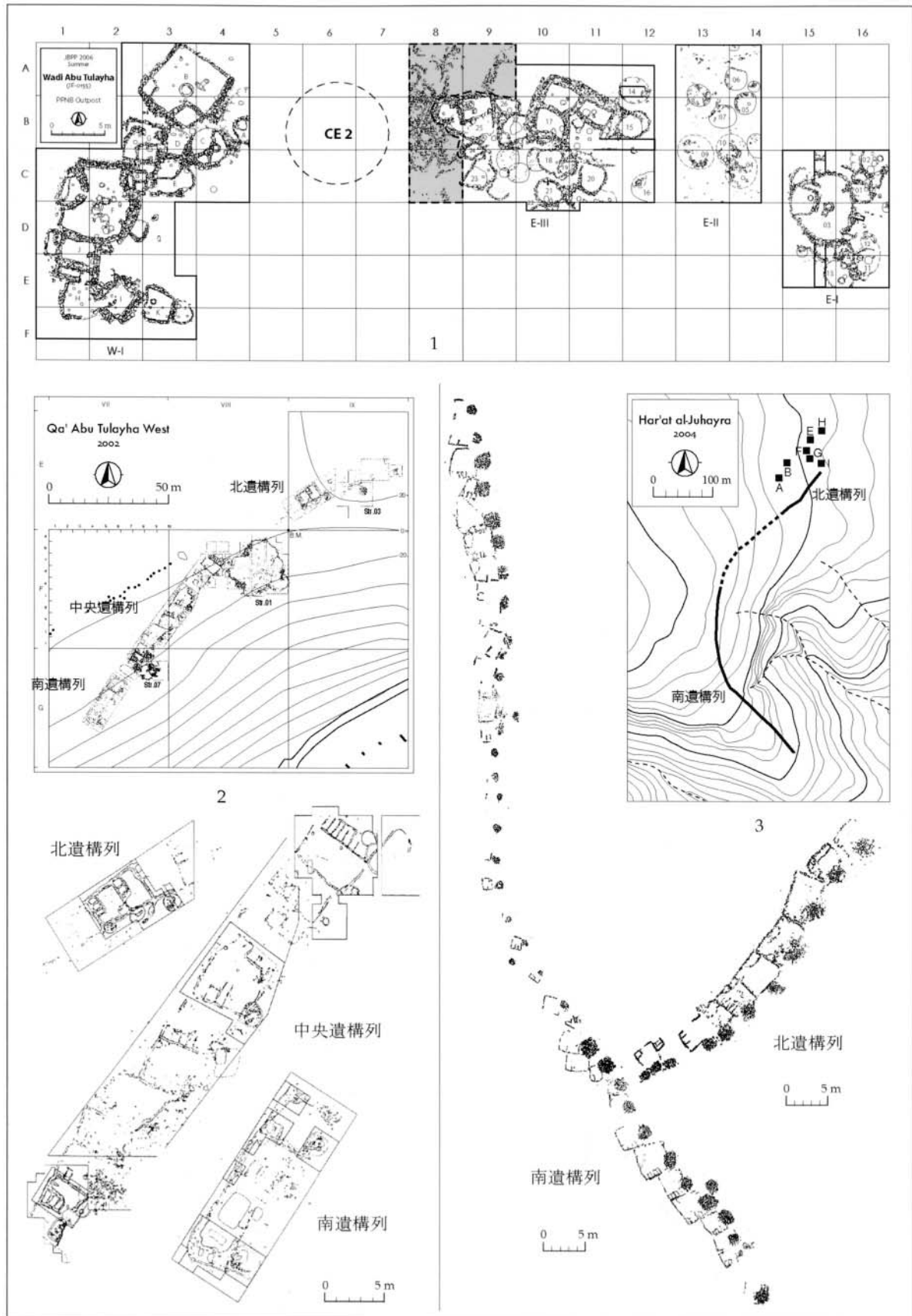


図 11 ジャフル盆地新石器時代の線状集落：

1 ワディ・アブ・トレイハ、2 ハラアト・アル・ジュハイラ、3 カア・アブ・トレイハ西

ではなぜ、上記の集落・擬集落は、ベドゥインの「少年の家」のように互いに距離を置かず、横列連結しているのだろうか。その答は、彼らの構築した住居または擬住居の構造にあるように思われる。ワディ・アブ・トレイハの移牧民、ハラート・アル・ジュハイラおよびカア・アブ・トレイハの初期遊牧民は、石造の住居・擬住居を造っている。このことは、彼らがテント以前の移牧民・遊牧民であったことを示唆している。だとすれば、彼らがテント固有の制約を受けていないのも当然であろう。

もう一つ。等しく線状の集落展開といっても、上記の集落・擬集落が「少年の家」のような平行線型ではなく、一線型になっているのはなぜか。これは、一つには立地の問題と思われる。これらの集落・擬集落は、平坦地に立地している。この場合、何本かの平行線に分割する必要はなく、一方向にいくらかでも延ばしていくことができる。無論、過度の延長は生活に支障を来すであろうが、それはその線状集落を構成する家屋の大半が同時に居住されている場合に限られる。少数の家屋が順次横方向に廃棄・更新されることによって線状集落が形成されたとすれば、集落展開の各時点で実際に居住されていたのはその一部に過ぎない。よって、集落の最終形態がどれほど長大になろうとも、実生活面での問題は生じないであろう。

その一例が、ワディ・アブ・トレイハの出先集落である。この集落は、(大型の矩形遺構1件と小型円形遺構数件から成る)建築複合体を基本単位に構成されており、こうした基本単位の(壁際廃屋葬を契機とする、東から西への)廃絶・更新のサイクルが最終的に線状集落を形成したと考えられる(藤井 2006, 2007; Fujii 2006a, 2006b, 2007a)。よって、線状集落は集落の最終形態に過ぎず、個々の時点では、一つまたは少数の基本単位が存在しただけということになる(そもそもこの程度の規模の集落であれば、たとえすべての建築複合体が同時に居住されていたとしても、生活上の不便は生じないであろう)。

一方、ハラート・アル・ジュハイラやカア・アブ・トレイハ西の線状集落は、墓制の一部としての擬集落であるから、こうした問題とはもともと無縁である。擬集落を構成する個々の擬住居ケルン墓はこの地域における初期遊牧民の部族長墓と考えられるので、地位継承の正統性を誇示するためにも、むしろ一線的な連結が好まれたとも考えられる。銅石器時代末における擬壁ケルン墓の縦列連結体(いわゆるKライン)が全長数キロにも及ぶ線状墓群を形成しているのも(藤井 2003; Fujii 2004a, 2004b)、前期青銅器時代におけるケルン墓が墓域の中でしばしば一線上に並んでいるのも(藤井 2004c; Fujii 2005a)、おそらくは同じ理由によるものであろう。

おわりに

ワディ・ブルマ東遺跡で確認されたベドゥインの「少年の家」について紹介し、このユニークな遺構の持つ考古学的な意義について検討した。その結果、1)この地域のベドゥインの子供たちは北西からの強い卓越風に対する防御感覚を幼いうちから体得しており、ごっこ遊びの家にも正しくこれを適用していること、2)そのため、各家屋が横方向に連なる。線状集落を形成していること、3)ごっこ遊びで最も重視されたと思われる台所に関しては、テントと同様の空間区分が(テントを模した擬似家屋は無論のこと、「石の家」を模した擬似家屋においてすら)根強く適用されていること、などが分かった。また、これらの観察が、ジャフル盆地の新石器時代集落または擬集落の解釈にとっても、有益な示唆を与えることが分かった。西アジア周辺乾燥域における集落・遺構形態の特異性を理解する上でも、ベドゥインの「少年の家」は面白い資料である。ワディ・ブルマ東以外にも複数の事例を確認しているので、別の機会に調査したい。

註

- 1) 西アジア遊牧民のテント跡を調査した事例は多いが(例えば、Cribb 1991; Banning and Köhler-Rollefson 1992 など)、「ごっこ遊びの家」を扱った事例は、筆者の知る限り皆無である。本例は、それだけでも十分重要であろう。加えて、子供の造った擬似住居だからこそ言えること、あるいは子供の作った擬似住居ですら言えること、も多い。その意味で、「ごっこ遊びの家」にはテント跡とは別の資料的価値があると思われる。
- 2) この場合の「少年(アウラード)」は、「年少者」の意味である。性別を規定するものではない。よって、少女も含まれる。
- 3) ジャフル盆地の北西部では、本遺跡以外にも、「少年の家」遺跡が複数確認されている。本文で後述するワディ・ウンム・クタイファは、その一例である。複数の遺跡の中で本遺跡を調査対象に選択したのは、遺跡自体の保存状態が良いこと、遺物が多数あったこと、発掘を予定していたワディ・ブルマ遺跡(前期青銅器時代のケルン墓群)に隣接していたため、調査許可証の申請が不要であったこと、などの事情による。また、同時に造ったと思しき遺構群なので、遺構論だけではなく、集落論の比較資料にもなり得る、という目論見もあった。ただし、集落から離れたこの遺跡を選択したために、建築当事者を特定できないという大きな欠陥も生じた。この点を補うには、将来、当事者特定の容易な別の遺跡を調査する必要がある。
- 4) ヨルダン高原の中でも、ジャフル盆地は風の強いことで有名である。沙漠では一般に気温の日較差が大きいため、大気対流に起因する強風が珍しくないが、ジャフル盆地の場合は地形的な要因も加わる。第一の要因は、標高(900m前後)の高さである。そのため、偏西風の影響をよりダイレクトに受ける。第二は、ヨルダン高原の西端を縦走る山脈が、ラシャディーエ村(ar-Rashadiyya)とショウバック(as-Shawbak)との間で約20km中断していることである。そのため、一種の「ビル風」効果が生じ、風下に位置するジャフル盆地に一年を通じて強い西風(または北西風)が吹き付けるのである。一方、ベドゥインのテントは、背面から風を受けて全体を安定させる仕組みになっているので、正面または横手から強風を受けるとひとたまりもな

い。事実、ジャフル盆地では、テントの倒壊による死傷者・焼死者が絶えない。この地域のベドゥインが卓越風の方位に異常に神経質なのは、こうした事情による。

参考文献

- 藤井純夫 2001「肥沃な三日月弧の外側：カア・アブ・トレイハ西遺跡の第三次発掘調査」『第7回西アジア発掘調査報告会報告集』43-49 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2002a「初期遊牧民の擬集落：カア・アブ・トレイハ西遺跡の第四次発掘調査」『第8回西アジア発掘調査報告会報告集』105-110 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2002b「初期遊牧民の擬集落：カア・アブ・トレイハ西遺跡の第五次発掘調査」『第9回西アジア発掘調査報告会報告集』14-15 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2003「先史遊牧民のネクロポリス：ヨルダン、カア・アブ・トレイハ西遺跡の第6次調査」『第10回西アジア発掘調査報告会報告集』14-15 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2004a『西アジア初期遊牧民の葬制に伴う「擬住居」「擬壁」の研究』科学研究費補助金成果報告書。
- 藤井純夫 2004b「西アジア新石器文化の防風壁・防風策」『西アジア考古学』5: 53-78。
- 藤井純夫 2004c「先史遊牧民のネクロポリス：ヨルダン、カア・アブ・トレイハ西遺跡の第6次調査」『第10回西アジア発掘調査報告会報告集』14-15 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2005「ヒツジ遊牧の起源と展開：ヨルダン南部、ジャフル盆地の総合調査（2004年度）」『第12回西アジア発掘調査報告集』26-38 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2006「ワディ・アブ・トレイハ：ヨルダン南部のPPNB遊牧拠点」『第13回西アジア発掘調査報告会報告集』35-47 頁、日本西アジア考古学会。
- 藤井純夫 2007「ワディ・アブ・トレイハ：ヨルダン南部のPPNB出先集落」『第14回西アジア発掘調査報告会報告集』45-51 頁、日本西アジア考古学会。
- Banning, E.B. and I. Köhler-Rollefson 1992 Ethnographic Lessons for the Pastoral Past: Camp Locations and Material Remains near Beidha, Southern Jordan. In: Bar-Yosef, O. and A. Khazanov (eds.) *Pastoralism in the Levant*, pp. 181-204. Madison, Prehistory Press.
- Cribb, R. 1991 *Nomads in Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Epstein C. 1998 *The Chalcolithic Culture of the Golan*. IAA Reports, No. 4. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Fujii, S. 2000 Qa' Abu Tulayha West: An Interim Report of the 1999 Season. *ADAJ* 44: 149-171.
- Fujii, S. 2001 Qa' Abu Tulayha West, 2000: An Interim Report of the Fourth Season. *ADAJ* 45: 19-37.
- Fujii, S. 2002a Qa' Abu Tulayha West, 2001: An Interim Report of the Fifth Season. *ADAJ* 46: 15-39.
- Fujii, S. 2002b Pseudo-Settlement Hypothesis: Evidence from Qa' Abu Tulayha West, southern Jordan. *Archaeozoology of the Near East V*: 181-194.
- Fujii, S. 2003 Qa' Abu Tulayha West, 2002: An Interim Report of the Sixth and Final Season. *ADAJ* 47: 195-223.
- Fujii, S. 2004a Harrat al-Burma Cairn Line, Wadi Burma South Cairn Field, and Harrat as-Sayiyah K-line: A Preliminary Report of the 2003 Summer Season of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *ADAJ* 48: 25-50.
- Fujii, S. 2004b Harrat al-Burma K-Lines and Wadi Burma Kite-site: A Preliminary Report of the 2003 Spring Season of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *ADAJ* 48: 285-304.
- Fujii, S. 2005a Wadi Burma North, Tal'at Abyda, and Wadi Qsair: A Preliminary Report of the Third Operation of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2 (2004, Summer). *ADAJ* 49: 17-55.
- Fujii, S. 2005b Harrat al-Juhayra Pseudo-settlement: A Preliminary Report of the Jafr Basin Prehistoric Project, 2004. *ADAJ* 49: 57-70.
- Fujii, S. 2006a Wadi Abu Tulayha: A Preliminary Report of the 2005 Spring and Summer Excavation Seasons of the Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *ADAJ* 50: 9-32.
- Fujii, S. 2006b A PPNB Agro-pastoral Outpost at Wadi Abu Tulayha, Southern Jordan. *Neo-Lithics* 02/06: 4-14.
- Fujii, S. 2007a Wadi Abu Tulayha: A Preliminary Report of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *ADAJ* 51 (forthcoming).
- Fujii, S. 2007b A Barrage System at Wadi Abu Tulayha: A Preliminary Report of the al-Jafr Basin Prehistoric Project, Phase 2. *ADAJ* 51 (forthcoming).
- Garrard, A., D. Baird, S. Colledge, L. Martin, and K. Wright 1994 Prehistoric Environment and Settlement in the Azraq Basin: An Interim Report on the 1987 and 1988 Excavation Seasons. *Levant* 26: 73-109.
- Goring-Morris, N. 1993 Foraging to Herding in the Negev and Sinai: The Early to Late Neolithic Transition. *Paléorient* 19/1: 65-89.
- Henry, D. O., C. Cordova, J. J. White, R. M. Dean, J. E. Beaver, H. Ekstrom, S. Kadowaki, J. McCorriston, A. Nowell, and L. S-Cummings 2003 The Early Neolithic Site of Ayn Abu Nukhayla, Southern Jordan. *Bulletin of American Schools of Oriental Research* 330: 1-30.
- Kirkbride, D. 1978 The Neolithic in Wadi Rumm: 'Ain Abu Nekheileh. In Moorey, R. and P. Parr (eds.) *Archaeology in the Levant*, pp. 1-10. Warminster, Aris & Phillips Ltd.

藤井 純夫

金沢大学

Sumio FUJII

Kanazawa University